



そこへ、北きたのほうから、まっ白しろなはねを、ひわひわとならしながら、  
百羽ひゃっばのツルが、とんできました。

百羽ひゃっばのツルは、みんな、おなじはやさで、白しろいはねを、ひわひわと、  
うごかしていました。くびをのばして、ゆっくりゆっくりと、  
とんでいるのは、つかれているからでした。

なにせ、北きたのはての、さびしいこおりの国くにから、  
ひるも夜よるも、やすみなしにとびつづけてきたのです。

だが、ここまでくれば、ゆくさきは、もうすぐでした。

たのしんで、まちにまっていた、きれいなみずうみのほとりへ、  
つくことができるのです。